

## 「都市住民の生活と意識に関する世代比較調査」

研究会代表：藤村正之（上智大学・教授）

事務局：羽瀨一代（弘前大学・准教授）

### 調査結果のお知らせ

青少年研究会では、この30年ほどにわたって、若者の生活と意識、行動と価値観に関する調査研究をおこなっております。とくに都市青年については、1992年より科学研究費による10年ごとの継続調査を実施しており、今回2012年11月、12月に実施した第三回調査の結果速報ができましたので、お知らせいたします。

### 1 調査概要

- 研究種別：日本学術振興会・科学研究費・基盤研究(A)（2011年度～2013年度）  
時期：2012年11、12月実施  
対象地：東京都杉並区・神戸市灘区、東灘区  
対象年齢：16歳から29歳、30歳から49歳  
調査方法：住民基本台帳を用いた層化2段無作為抽出によるアンケート調査  
（訪問留置回収法・一部郵送回収法併用）  
計画サンプル：標本数4200票（杉並2100、神戸2100）  
有効回収サンプル：16歳から29歳 1050票（43.7%） 【男女=46.4%：53.6%】  
30歳から49歳 719票（39.9%） 【男女=46.6%：53.4%】

### 2 主だった知見：都市青年の堅実化とオタク化

- ①文化的関心事のオタク化【2002年調査と比較】  
テレビゲームファン（4.0%→7.5%）、マンガファン（4.4%→9.4%）、アニメファン（1.4%→7.1%）増加  
テレビドラマファンの減少（12.1%→5.8%）
- ②「ヒトカラ（ひとりカラオケ）」欲求の浸透（5 音楽項目参照）
- ③メディアを通じた出会いの増加（6 メディア項目参照）
- ④友人関係の同質化傾向、ケンカをすると修復が難しい（7 友人関係項目参照）
- ⑤恋愛交際経験率は横ばい、恋愛交際経験者のなかにいる恋愛不活発な層の存在を確認（8 恋愛項目参照）
- ⑥自分らしさの低減、自己啓発意識の強化（9 自己意識項目参照）
- ⑦都市住民の高学歴化【2002年調査と比較】  
大学・大学院卒（40.4%→53.1%）
- ⑧親に対する優しい感情（10 家族関係項目参照）
- ⑨規範意識の高まり（11 社会意識項目参照）

### 3 今後の公表予定

- ①日本社会学会（2013年10月12日～13日、慶應義塾大学）
- ②学術出版（2014年夏予定、恒星社厚生閣など）
- ③国際社会学会（2014年7月、横浜・パシフィコ横浜）

### 4 研究会の詳細情報

青少年研究会（<http://jysg.jp/index.html>）

過去2回の調査の主な学術出版物

1992年調査：高橋勇悦監修・川崎賢一・芳賀学・小川博司編

『都市青年の意識と行動—若者たちの東京・神戸‘90’S（分析編）』恒星社厚生閣、1995年  
2002年調査：浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房、2006年

## 5 音楽

文責：木島由晶（桃山学院大学）

### ● 音楽の「感情サプリ化」の進行：

自分の気持ちを変えるために、状況に応じて曲を選んで聴く傾向が増加（2002年：63.6%→2012年：80.2%）。近年の若者にとって音楽は、個人的な感情を調整するサプリメントのような役割をはたしているものと考えられる。

### ● 「ヒトカラ」欲求の浸透：

旧来カラオケは接待文化の延長で、または同年代の友人たちの社交ツールとして親しまれてきたが、2012年調査では「ひとりでカラオケ店を利用したいと思う」という意見に30.1%の人が肯定回答（「そうだ」=14.9%、「まあそうだ」=15.2%）を示した。友人と歌うときの練習に、他人に聴かせにくい音楽を歌いたくて、歌う順番を待つ時間が惜しいからなど、「ヒトカラ」の台頭は、旧来の利用法を超えて、若者がカラオケを自在に使いこなすはじめたことを象徴しているだろう。

### ● オタク系音楽の躍進：

アニメ・コミック・ゲームといった文化ジャンルの伸びは他の調査結果からも確認できるが、好きな音楽ジャンルを問う質問でも、30.8%の人が「アニメ・声優・ゲーム」が好きと回答し、13.2%の人が「同人音楽・ボカロ」が好きと回答した（複数回答）。なお「同人音楽・ボカロ」は、若者に人気の高いウェブサービス、ニコニコ動画を中心に広がりを見せている音楽ジャンルをさす。ジャンルごとの人気順位をみても、オタク系とみなしうる音楽ジャンルが、もはやマイナーな趣味ではなくなっていることがうかがえる。かつてオタクは恥ずかしいものだったが、もはやオシャレな印象も獲得しているのかもしれない。

好きな音楽ジャンルの順位

順位	ジャンル名	%	度数	順位	ジャンル名	%	度数
1	Jポップ	75.7	795	12	洋楽ヒップホップ	15.1	159
2	邦楽ロック	38.2	401	13	同人音楽・ボカロ	13.2	139
3	洋楽ポップ	34.3	360	14	Jラップ	9.1	96
4	アニメ・声優・ゲーム	30.8	323	15	ハウス・テクノ	9.0	94
5	洋楽ロック	30.0	315	16	パンク	8.3	87
6	映画音楽・サントラ	25.9	272	17	ヴィジュアル系	7.0	74
7	クラシック	21.4	225	18	洋楽レゲエ	6.2	65
8	アイドル	18.1	190	19	演歌・歌謡曲	6.2	65
9	ジャズ	17.9	188	20	ジャパレゲ	5.9	62
10	R&B	17.5	184	21	ヘヴィメタル	5.7	60
11	Kポップ	16.2	170	22	フォーク・ニューミュージック	5.6	59

### ● 音楽不況の実態：

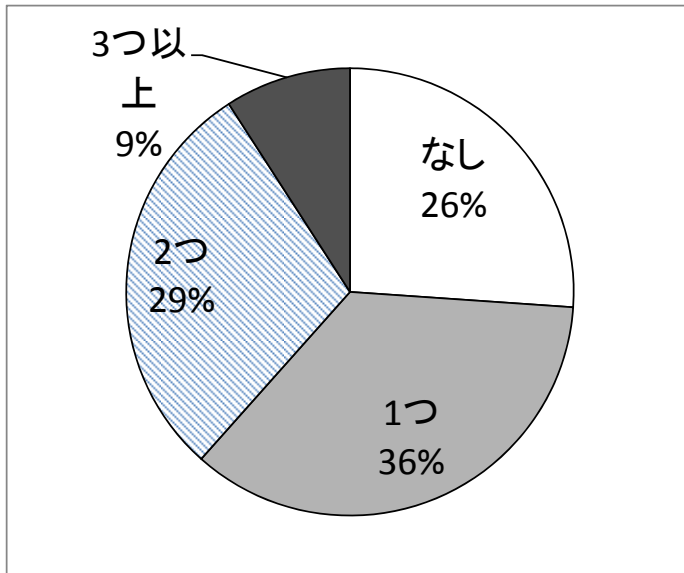
1998年がピークの「音楽バブル」が弾けて以降、CDの売上不振が騒がれて久しい。現にこの10年でCDを購入する割合は21.7%減少した（2002年：65.2%→2012年→43.5%）。他方、1997年のフジロックフェスを皮切りに、音楽ビジネスはライブで儲ける時代に突入したとする意見がある。だが、ライブ参加者の割合は、この10年でほとんど変化がない（2002年：22.3%→2012年：23.6%）。楽観的な意見とは異なり、音楽不況の実態は、かなり深刻な域に達しているようだ。

## 6 メディア

文責：阪口祐介（桃山学院大学）

### ● 4人に3人がSNSを利用

#### ■ SNS利用数の分布

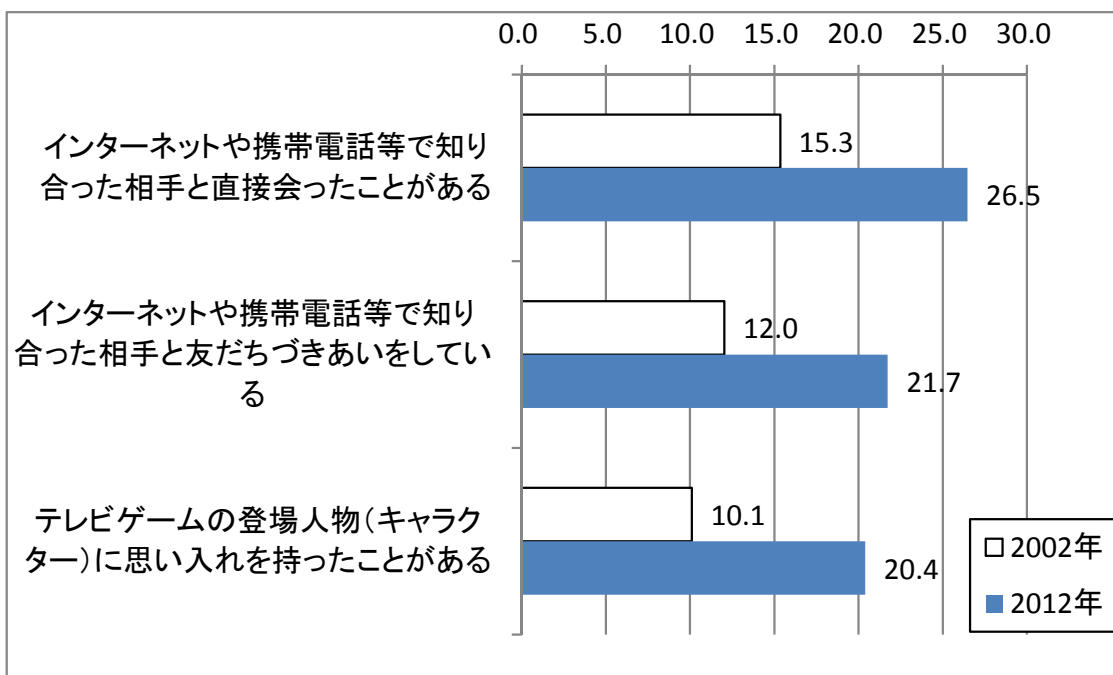


現在利用している以下の SNS についてたずねた項目を集計（ミクシィ、モバゲー、Facebook、グリー、その他の SNS）

### ● この10年間で、ネットや携帯を通じた出会い、テレビゲームのキャラ萌えが増加

#### ■ メディアを通じた行動・体験の変化

・ ネットや携帯を通じた相手との出会い、友人作りが増加、テレビゲームのキャラ萌え増加。



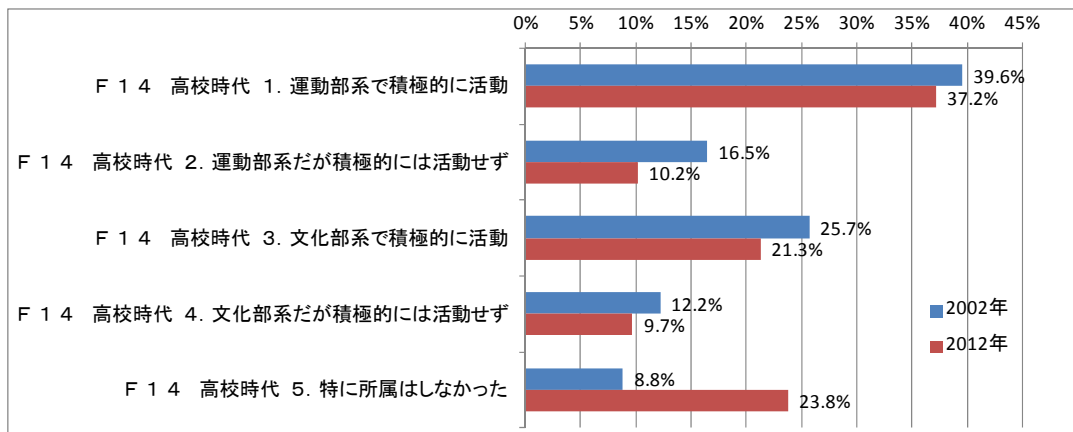
2002年 N=1088、2012年 N=1054 上記の質問が当てはまると回答した人の率 (%)

## 7 友人関係

文責：辻泉（中央大学 [tsuji@tamacc.chuo-u.ac.jp](mailto:tsuji@tamacc.chuo-u.ac.jp)）

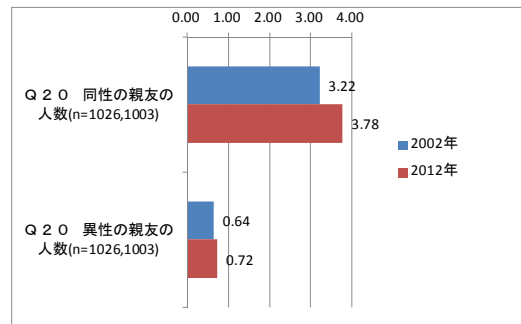
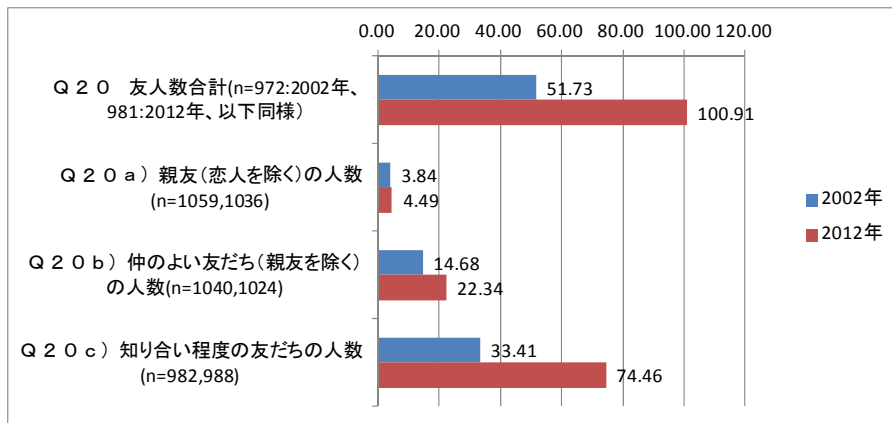
### ● 友人との出会いの変化：部活加入率の低下とメディアを介した出会いの増加

部活動参加の経年変化（MA、n=2124：2002年、2124：2012年）

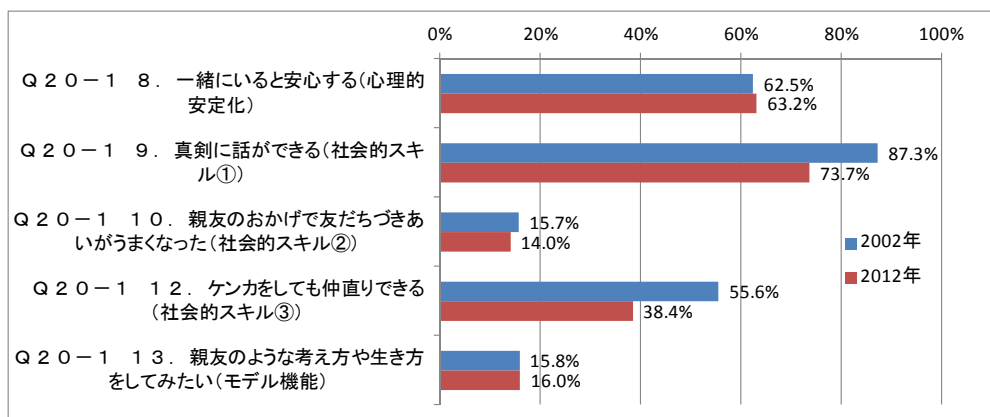


### ● 友人関係の変化：人数は増加傾向（合計平均で「友だち100人時代」へ突入）だが、高まる同質性（増加したのは同性親友、親友から学ぶ社会的スキルは減少）

友人数の経年変化（単位：人）

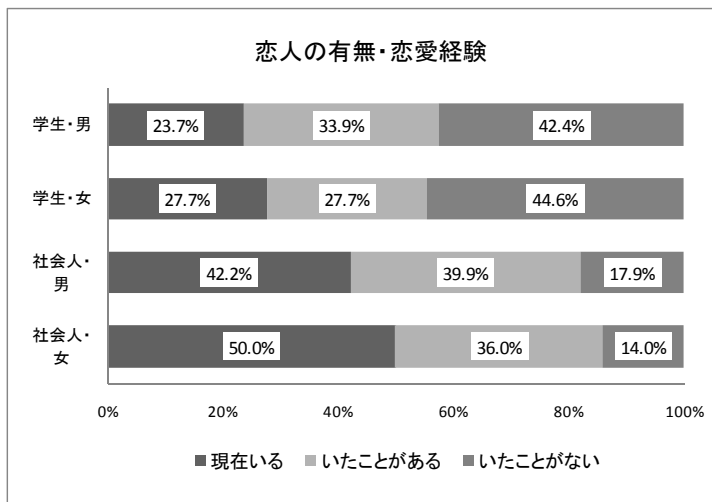


「親友」の社会化機能の経年変化（MA、n=1834：2002年、1834：2012年）



## 8 恋愛:都市に住む若者は、どのような恋愛意識を抱いているのだろうか？

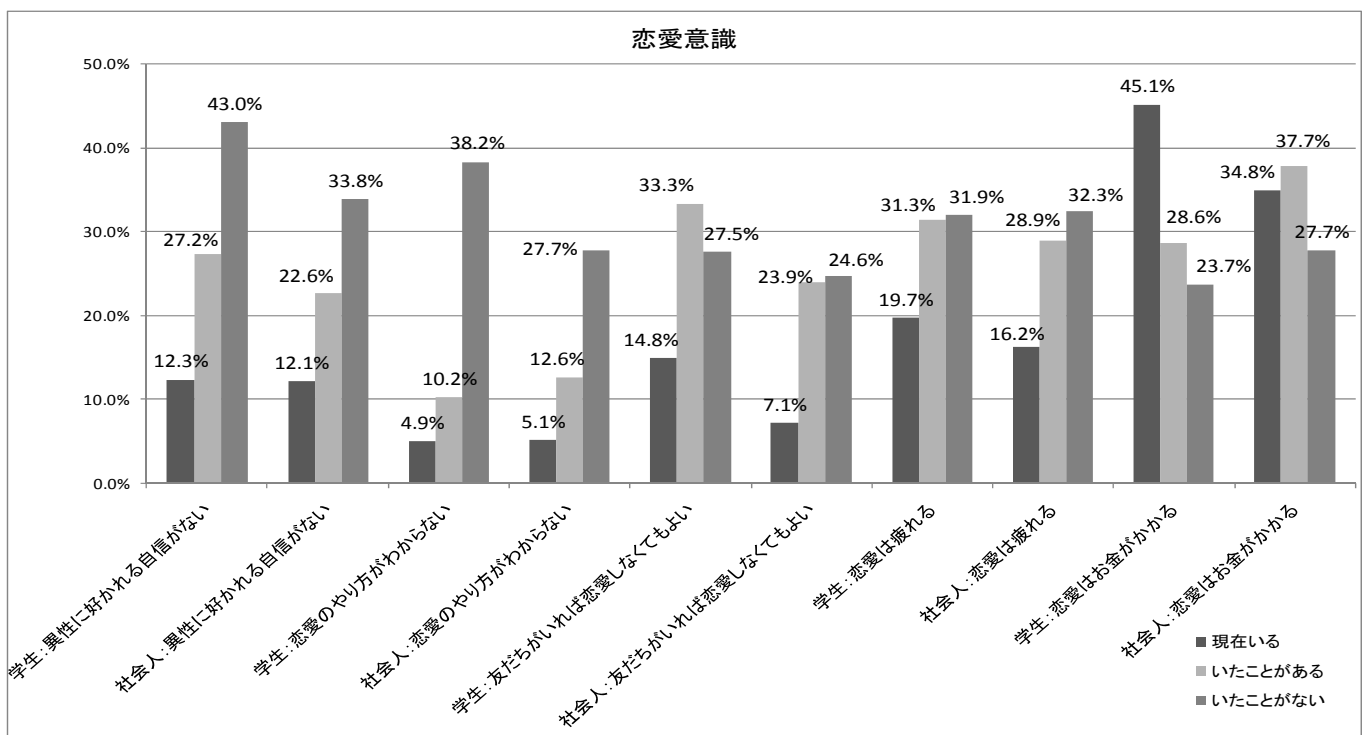
文責：木村絵里子（日本女子大学学術研究員 [eriko.kimura@gmail.com](mailto:eriko.kimura@gmail.com)）



近年、「草食男子」という表現をよく耳にするが、既存の全国調査からは女性も含む若年層の恋愛に対する消極性を確認できる。例えば第14回出生動向基本調査（2010）では交際相手をもたない未婚者の割合が男女ともに増加しているという。だが本調査の交際率・交際経験率は、青少年研究会1992・2002年調査と比較すると、若干の増減はあるものの、先の全国調査のような大きな変化はみられない（左記の表は2012年調査）。したがって都市に住む若者（学生・社会人）の交際率・交際経験率から判断する限りでは、必ずしも「草食化」が進んでいるとはいえないようだ。しかしながら、下記の表の恋愛意識に関しては注目すべき点がいくつかある。“恋愛経験の全くない者”は、学生・社会人ともに「異性に好

かれる自信がない」、「恋愛交際のやり方がわからない」という意識が他の項目と比べて高い割合を示している。そして「恋愛はお金がかかる」という意識は、学生では“現在恋人がいる者”、社会人では“過去に恋人がいたことがある者”に多く見られた。「モノを買わない若者」、つまり消極的な（ように見える）消費行動と関連している可能性も考えられる。

さらに、“過去に恋人がいたことがある者”では「恋愛は疲れる」が比較的高くなっている。未経験者の割合も高いが、この「疲れる」という意識に込められた意味合いは両者にとって全く同じものであるとは言えないだろう。また「友だちがいれば恋愛しなくてもよい」、（表にはないが）「恋愛より勉強や仕事を優先している」の肯定率が高いのも、この“いたことがある層”の特徴である。“いたことがある層”では「恋愛は疲れる」という意識を抱き、恋愛より勉強や仕事、友人関係を優先している者がそれぞれ約3割いるのであり、“恋愛に対して不活発な層”は必ずしも“恋愛経験の全くない層”に限らないという興味深い傾向にあることを確認できる。

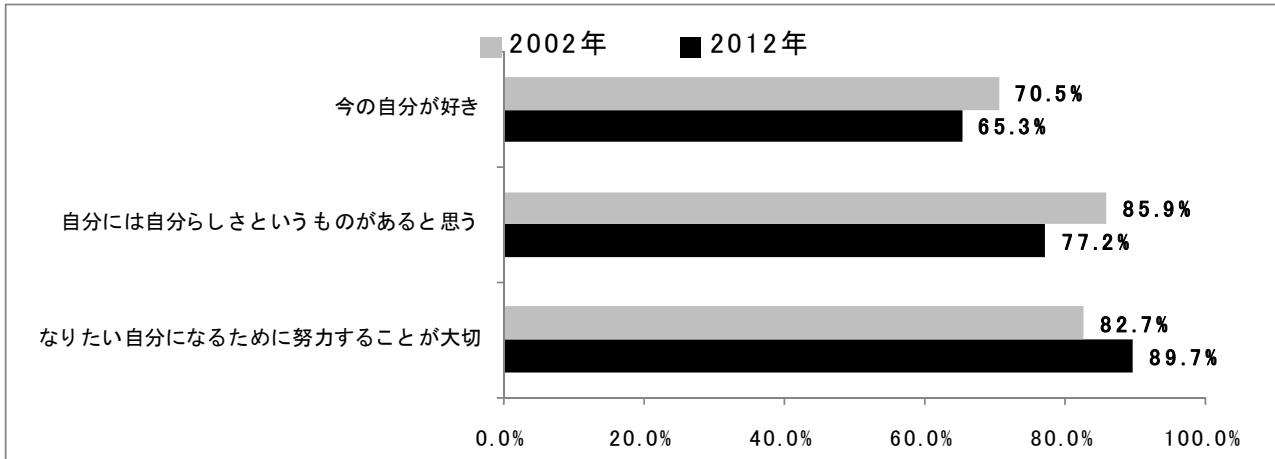


## 9 自己意識

文責：牧野智和（日本学術振興会）

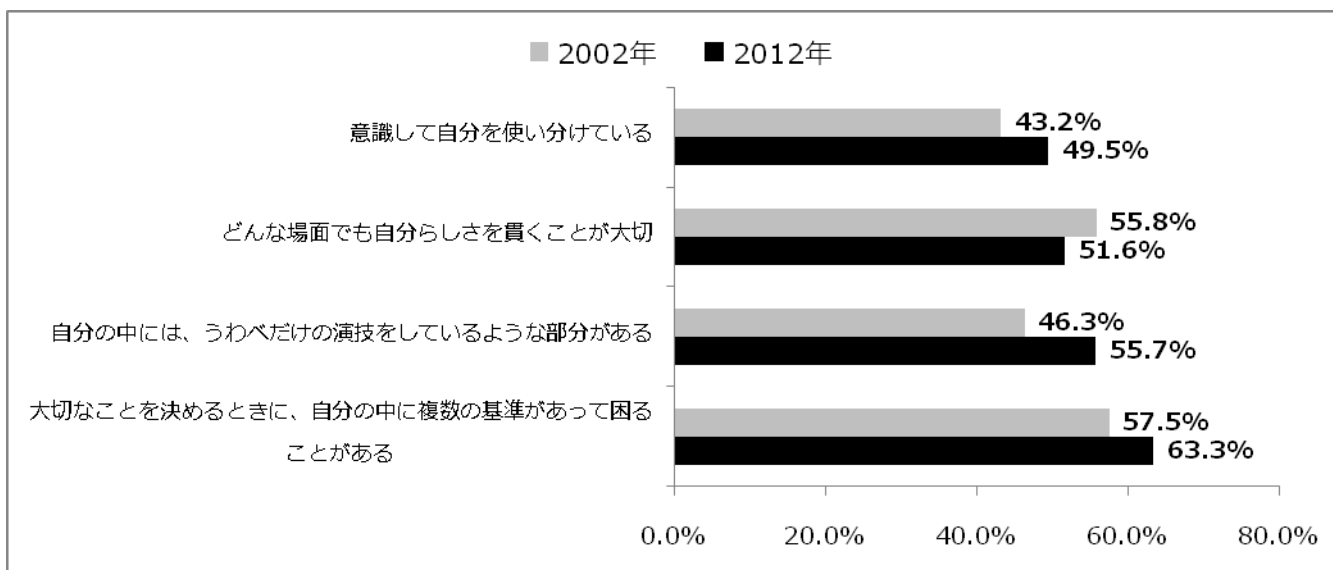
### ● 自己肯定感・自分らしさの低減傾向と自己啓発化

- 「今の自分が好き」「自分には自分らしさというものがあると思う」への肯定回答がそれぞれ減少した。一方、「なりたい自分になるために努力することが大切」への肯定回答は上昇している。
- 自己肯定感や自分らしさを感じられない若者が増える一方で、なりたい自分になるための努力はますます重要なものとなっている。これらからは「自分らしさ」をめぐる現実と理想のギャップが広がっているといえないか。



### ● 自己の戦略的使い分けの進展と自己の揺らぎ

- 「意識して自分を使い分けている」への肯定回答が増加する一方で、「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」への肯定回答が減少した。場面や状況に応じて、自分の立ち振る舞いを調整する度合いが高まっていることが伺われる。
- また、「自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある」「大切なことを決めるときに、自分の中に複数の基準があって困ることがある」への肯定回答がそれぞれ増加しており、自分の立ち振る舞いの使い分けが進展するなかで、自らのうちに矛盾や揺らぎが発生する度合いも高まっていることが伺われる。



## 10 家族意識：親子関係規範

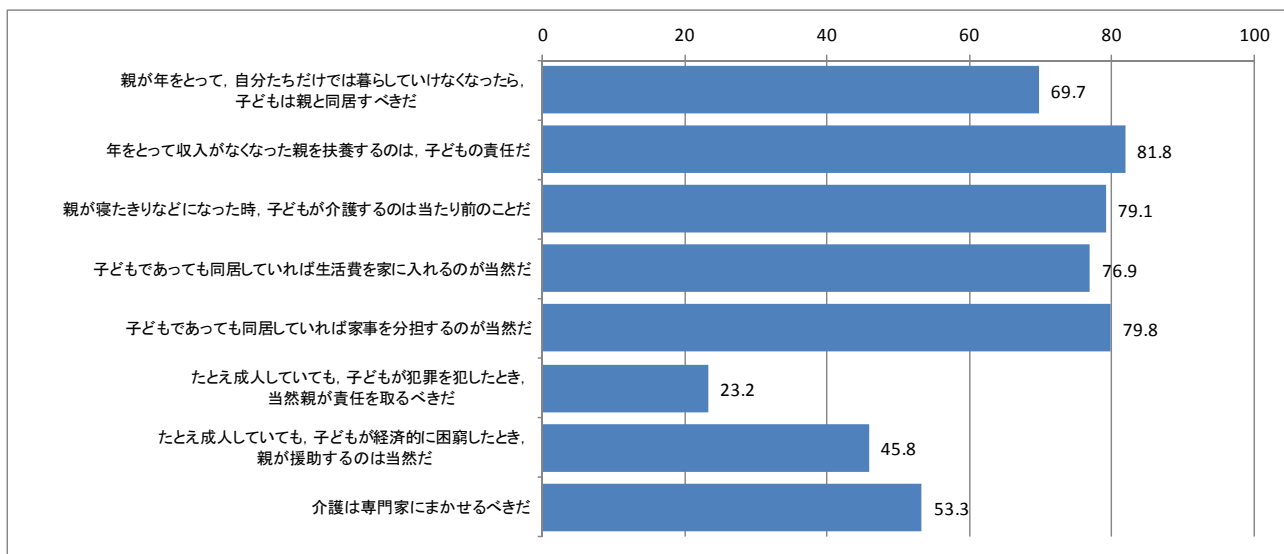
文責： 苦米地伸（東京学芸大学）

自らの親の高齢化による同居、扶養、介護、ならびに同居による家計補助、家事分担についての項目において、いずれも7割かそれ以上が肯定している。つまり、子から親への家族意識については、伝統的な家族規範を保持する傾向が高いと言える。

ただし、成人子の逸脱行為に対する親の責任は否定する傾向が高く、この点に関しては家族責任よりも自己責任を重視しており、また成人子の困窮への経済支援については、親の責任を肯定する割合が45%ほどにとどまっている。親から子への家族意識、とりわけ親の責任に関しては、子から親への意識とは相対的に低い傾向にある。

また、一般的な意味での介護については、専門家に任せるべきだと回答する割合が53%となっており、自らの親の介護と一般論としての介護を切り離して考えていることが伺える。

総じて言えば、子は経済的にも行為の面でも親を思い、相対的に子自身の失敗に関する親の責任を回避しようとしている。要するに親に優しい若者たちの家族意識が示されていると言えよう。



## 11 社会意識

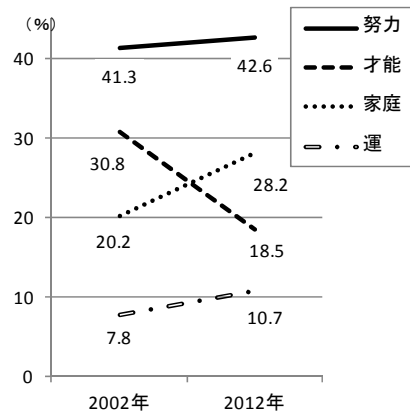
文責：寺地幹人（国際大学 GLOCOM [mikitot@qg8.so-net.ne.jp](mailto:mikitot@qg8.so-net.ne.jp)）

### ● 勤勉さや道徳・規範意識の喪失は確認されない

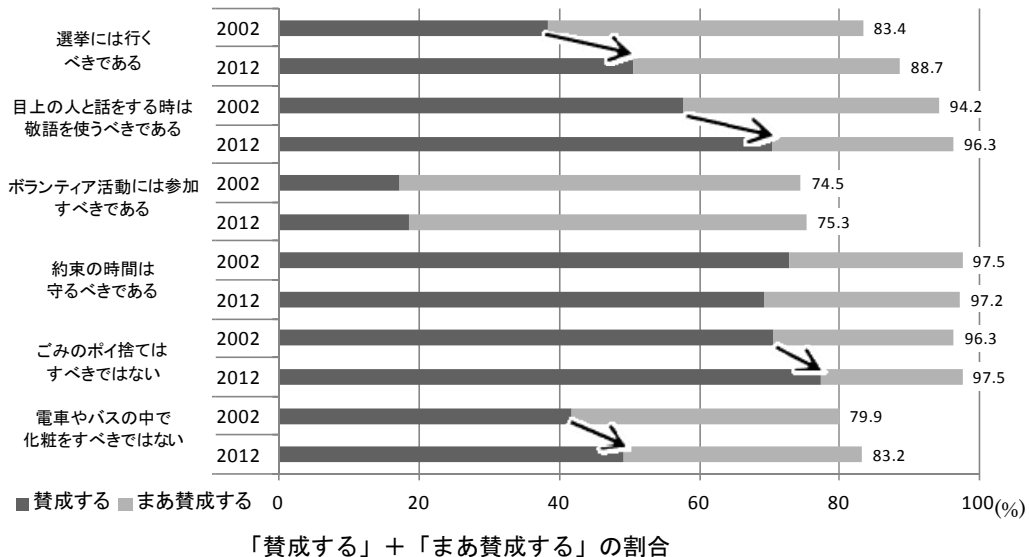
－ 経済的成功の要因として、個人の努力が1番目に重要だと考える割合は微増。個人の才能を成功要因と考える割合が減少した一方で、生まれ育った家庭の環境の割合が増加した。

－ 規範的な価値観への賛否に関しては、6項目中4項目において「賛成する」と回答している者の割合が5%以上高くなり、また、「賛成する」と「まあ賛成する」を合わせた割合も、2002年と同程度もしくは微増となっている項目がほとんどである。

⇒これらから、今日の若者が勤勉さや道徳・規範意識を喪失したということは、確認されない。



経済的成功に重要だと考える要因（1番目）



### ● 過去を振り返る今日の若者たち

－ 時間意識について尋ねた質問に対して、約2割の若者が、「過去を振り返って、いろいろ思い出しながらすごしている」というのがふだんの生活態度にもっとも近いと答えている。この割合は、他の3つの選択肢より小さいが、数年前の他の調査における若者の回答よりも、かなり高い割合を示している（科研費「時間資源の配分と生活の質との関連をめぐる社会学的分析」で数年前に行われた調査では、全国の既婚の20歳代で5.1%）。また、この約2割というのは、他の調査における高齢者の回答の割合に近い（科研費「現代日本における生活構想の展開に関する社会学的分析」における調査では、都内数区の70歳代で16.6%、80歳以上で23.5%）。

⇒このことから、今日の若者において、不確実な現代や未来よりも確かな過去を指向する傾向の高まりが、うかがわれる。

